

中国新聞連載

生きて

2011年9月27日～10月19日

合計15回

1 バイオニア 世界トップへ挑戦続け

9月27日

世界の海原を行き交う原油タンカー。船舶用ポンプメーカーのシンコー(広島市南区)は、世界の原油タンカーの8割にポンプとタービンを供給している。戦後間もなく同社に入った筒井数三会長(92)。その歩みは、町工場が世界トップメーカーに駆け上がる成長の記録と重なる。

◇

「まず中心線を引き」。私が通った県工(広島県立広島工業学校、現県立広島工高)の製図の先生の言葉です。私たちが書き方を悩んで、一步も前に進まないと「まず中心線」。とにかく、動かないと始まらないということですよ。私はこの言葉を胸に経営に臨んできました。

創業者の娘と結婚した1947年、取締役工場長として入社。役員歴は来年春、丸65年を迎える。

当時は従業員30人程度の町工場でした。戦時中は海軍主導の建造船にポンプを納めていた。だけど、敗戦で船舶建造は禁止された。入社時は精米機やのこくずを燃料とするストーブを生産していました。

給料の遅配もあった。工場でアルミ鍋を作って現物支給したことも。戦争で私は旧満州(中国東北部)やフィリピンなど前線の飛行機修理工場に赴任していた。転々としたけど、どこも最新工場だった。それだけに敗戦後の町工場にショックを受けましたよ。古く、暗い。ただ、工場長として入社した以上、工場に尽くし、

骨を埋める覚悟を決めました。

48年、戦後初の輸出船に載せるポンプの受注が飛躍のきっかけとなった。契約条件は業界に前例のない出荷前検査の実施だった。

三井造船でノルウェー向け捕鯨船の建造が決まっていた。恩師の知人が三井造船にいる縁で、発注をお願いにいった。

交渉では、どんなに難しいことも「やります」「できます」と答えた。熱心さが買われて受注につながった。ただ通常は船に据え付けてからの検査を、工場を出荷する

前に済ませるのは、やってみると大変。捕鯨船にあるボイラーを工場で試験用に確保することすら難儀した。

この60年余り。前例は気にせず何ごとにも正面からぶつかってきた。県工の別の先生が掛けてくれた「人のやらないことをやれ」の言葉。私の人生の根っこにあり、シンコーを世界トップに導いた言葉ですよ。



「何ごとにも、とにかく正面からぶつかってきました」

2 工学への関心 運転士夢見て勉学に励む

9月28日

私の名前が数三なのは、両親にとって3番目の子どもだからです。口田村(現広島市安佐北区口田)の岡崎という名の農家の6人きょうだいの次男として生まれました。今、私の名字が筒井なのは、戦後にシンコー創業者の筒井留三の婿養子となったからです。

幼い頃は胃腸が弱く、学校を休みがちだった。

貧弱だった。学校の試験中に家で勉強をしていて2日連続で吐血しちやったこともある。病気が多くてね。その代わりに勉強に凝りました。口田尋常小(現口田小)の頃から、朝4時に起きての予習復習を欠かさなかった。

勉強を頑張ることが親孝行になると強く思ってもいました。

うちは田舎の農家で決して裕福ではなかった。だから、お客さんが来ないと白米が出ない。でも、病気がちの私は家族みんなが麦飯の時も白い飯を出してくれた。育てて



父の岡崎彦一さん④に抱かれる幼い頃の筒井さん。左は兄の輝夫さん

くれた両親には感謝いっぱい。従って、両親への孝養心は特別でした。

広島県立広島工業学校(県工、現県立広島工業高)を経て、広島高等工業学校(現広島大工学部)の機械科に進んだ。

工学が好きだったんです。きっかけは、口田の真ん中を通っている芸備線。機関車がポッポ、ポッポと煙を吐きながら走っていくじゃないですか。蒸気を使って車輪を力強く動かす。その仕組みに憧れました。

県工時代に機関車の運転士になりたいと考え、まずは車輪が動く理論を学ぶために高等工業に進みました。夏には実習で機関車に乗りました。矢賀(広島市東区)の車両基地から四辻(山口市)まで運転士の横で動きを見ている。投炭もやらせてもらった。本当に面白かった。

卒業予定3カ月前の1941年12月8日、太平洋戦争が始まった。

高等工業の卒業年になると、運転士を目指すとか言っていられなくなりました。アメリカとの戦争は避けられず、すぐに軍隊に引っ張られることが分かってきた。であれば一兵卒ではなく、学んだ成果を生かせる航空技術将校になりたいと考えました。

将校の候補生となるため、水戸陸軍飛行学校(茨城県)を受験しました。合否判定の前に、徴兵検査も受けました。あの12月8日です。徴兵官が最初のあいさつで真珠湾攻撃を話した。試験会場がしーんと静まり返ったのを覚えています。

3 航空技術将校 戦地の工場で製造監督

9月29日

太平洋戦争が始まった1941年12月、私は広島高等工業学校(現広島大工学部)を3カ月繰り上げて卒業しました。翌1月10日には、航空技術将校の候補生として水戸陸軍飛行学校(茨城県)に出頭。4カ月でさっと少尉に任官され、旧満州(中国東北部)ジャムスの、野戦航空修理廠に赴任しました。

修理廠では旧日本軍の飛行機のエンジン整備を手掛けた

旧日本軍の飛行機にも6カ月ごとなどの定期点検があり、各地の修理廠が受け入れていた。将校だった私の役割は発動機(エンジン)のピストンリングの交換などで、現地の兵隊を指揮すること。エンジンの分解や部品の潤滑油の焼き付けの有無の確認などで下士官を監督指導した。

取り扱う部品の説明書を読み込み、仕組みを理解した上で作業を指示する。大変だったが、私はこの仕事を面白いと感じた。工学の知識で部下を動かして飛行機を整備し、再び戦地に飛ばすという目的を達成する。命あつて戦争が終わったら工場経営をやってみたいなと思った。

44年3月にはフィリピン行きを命じられる。戦況は悪化の一途をたどっていた。

旧満州からフィリピンに移る途中、広島に立ち寄りました。親の顔を見るのも最後と思い、母と一緒に写真に写りました。フィリピンでの仕事は特攻用の飛行機や爆弾の調達。こればかりやっていました。

まさに九死に一生を得るといふ体験を何度もしました。

砲弾や燃料を保管していたセブ島で、グラマン(米軍機)3機に見つかった。急降下するグオーンという重たいエンジン音と機銃掃射の。パ。パ。パーンという音。着弾したのは、とっさに隠れたヤシの木の10メートル先ですよ。今でも生きているのを不思議に思います。

45年にはベトナムに転任。木製燃料タンクの製造を監督した。

金属がなくなり、ベニヤ板でタンクをつくるようになってた。それでも最後は日本が勝つと信じ、真剣に懸命に仕事に打ち込んだ。板はぬかくぎで留める。くぎはフランス人社長の工場に作らせていたが、ある時、納期を守らなかつた。私はかつとなり、左手を腰に当てて右手でこのフランス人を思い切りビンタした。

民間人に辱めを与えてしまった。このビンタで私は戦後、戦犯として追われるようになったのです。



フィリピンへ出向く直前に母ミサオさん(左)と写真に納まる筒井さん(1944年)

4 帰国の途 風貌変えて復員船乗る

9月30日

ベトナムのサイゴン(現ホーチミン)で終戦を迎えた。

将校の集会所で玉音放送が流れました。ポツダム宣言を受諾するとの天皇の言葉を聞いて、驚いた。将校が20人くらいいましたかの。全身の力が抜けて、われわれは日本に帰ることができるかと考えました。上司に何を聞いてもよう答えん。次の指示を待とうとなった。

私は体調がすぐれず、すぐに病院に行きました。8月下旬でしたでしょうか。検査をするとアメーバ赤痢とマラリアと診断された。そして、入院して絶えず注射を打つ生活になりました。親切な看護師が手をもんでくれたりして何とか耐えられた。運良く日本に帰れたら、この人と結婚しようと考えたほどでしたよ。

入院生活は1946年4月に大竹市へ向かう復員船に乗るまで、8カ月間に及んだ。

入院後すぐに、フランス兵がベトナム兵が私を捜しているといううわさが広がりました。戦時中に軍人でもないフランス人社長をビンタした戦犯として扱われているという。捕まったらどうなるか分からない。射殺されるかもしれない。そこで、日本に帰るまで病院に隠れておけという話になった。

入院中はひげをボウボウにはやして、顔が分からんようにしていました。46年4月末、復員船の乗船許可を得る検査があった。フランス人の検査だったと記憶しています。生きた心地がしなかった。ひげ面の私は

ずっと頭を下げ、検査官と決して目を合わせませんでした。うまく見つかからずに済んだ時にはほっとした。やっと日本に帰れると思えました。

復員船にはサイゴンで終戦を迎えた多くの日本人が乗り込んだ。

終戦時、私は旧日本軍の飛行機整備工場で副隊長のような立場となっていました。上司の隊長は暴力任せで、戦争が終わると部下の恨みが爆発した。大竹に向かう船の中で多くの兵士が隊長に襲いかかり、海に突き落とそうとした。私は副隊長の立場で両者の間に入った。部下の信用を得られない隊長を無事に日本に帰す。このことを私の任務と思うように努めました。

サイゴンから大竹まで2週間かかりました。その間、私はリーダーとはどうあるべきかを考えた。工場を経営するなら、そこで働く従業員をどうやって幸せにするのか。大竹に上陸したのは、5月15日でした。



戦地での筒井さん(最前列左から3人目)。将校として復員するまで部隊の統率に気を配った

5 結婚 創業者後継として入社

10月1日

終戦翌年の5月、ベトナムから広島に戻りました。工場経営の夢を持ったけど、何の手段もない。仕事を探さないと食べていくこともできない。そこで、母校の広島高等工業学校(現広島大工学部)の科長に就職先の相談に行きました。学校以外に頼るってなかってなかったのです。

広島港に面していた宇品造船所を紹介された。1946年11月ごろ、入社した。

私は、宇品造船所に勤めながら休日には近くの町工場を見て歩いた。阿部鉄工所(現アベックス、広島市西区)や鑄造所などに行き、工作機械や歯車を見ては知識として頭に入れていきました。

時には三原や廿日市の工場にも出掛けました。電車やバスの移動にはお金が要った。蒲刈(呉市)に住む僚からミカンを分けてもらい、口田(広島市安佐北区)の自宅周辺で売ってお金を工面していましたよ。

47年2月、宇品造船所に広島高等工業学校で学んだ勝盛豊一先生が訪ねてきた。

新興金属工業所(現シンコー)の技術を全国の造船所へ紹介していた勝盛先生から、社長が後継者を求めていると聞いた。娘ばかりなので婿を探している。そういう気持ちはないかと問われた。

将来の工場経営を考えていた私は応じようと思った。ところが、両親に相談すると声を上げて泣かれた。

兄は既に福岡県で働き、父は私が農家を継ぐと期待していたわけです。

結局は母が婿養子を許しましょうと父に言ってくれました。「残っても農業をするわけじゃない。事業をやりたいと言いはる」と父を説得してくれた。勝盛先生の話をいただいて、1週間くらいでしようか。両親の了解を得たと返事をしました。

創業した筒井留三さんの長女、満枝さんと結婚。取締役工場長として働き始める。

3月16日に結婚式を挙げて、宮島の旅館で初夜を過ごしました。翌日には会社に戻った。幹部が披露の宴をやってくれましたよ。

ただ、工場の状況はシロツクだった。原爆で倒れた木造の建物を起こし、はすかいを入れて何とか立っている。戦地の立派な工場と比べ、本当に情けない思いがしました。



結婚当時の筒井さん(左)と妻満枝さん(1947年)

6 輸出船 人脈生かして礎を築く

10月4日

私とシンコー(当時新興金属工業所)を結びつけた広島高等工業学校(現広島大工学部)の勝盛豊一先生には入社後もお世話になった。東京大卒の勝盛先生は、同窓生があちこちで要職に就いていた。教え子も多くの造船所にいた。私はその人脈をたどって商談に臨んでいました。

1948年、戦後初の輸出船となるノルウェーの捕鯨船の建造を三井造船が決めた

勝盛先生のとてを生かして三井造船の購買担当者と交渉。機関室へ燃料油を送るポンプをやらせると頼んだ。すると、性能試験を済ませたの出荷という条件が出てきました。

当時、メーカー製造の各種ポンプは、造船所が船に載せて稼働もテストするのが慣例だった。

三井造船は「戦時中、ポンプメーカーはろくな物を造らず、造船所で動かすのに時間がかかって困った」との話をした。だから、確実に動く状態



三井造船が建造した戦後初の輸出船。シンコーのポンプを搭載した

で出荷してほしいと。

シンコーには輸出船が採用する蒸気ポンプの製造実績がなかった。試験でポンプを動かすには蒸気が必要。その蒸気をつくるボイラーもなかった。でも、条件はのみました。

苦労は想像できたが、この注文は取りたかった。当時は連合国軍総司令部(GHQ)が、戦後禁じた新造船をやつと認め始めた頃。この輸出船のポンプ製造をシンコー飛躍の足掛かりにと強く考えてました。

三井造船からポンプ3台の受注に成功した。

学生時代の教科書も読み返して蒸気ポンプの仕組みを理解し、4カ月かけて仕上げました。試験では旧軍需工場のボイラーをシンコーに移して使おうとしたけど、壊れていて駄目。がっかりしました。結局、広島大のボイラーを借りました。

その試験も容易には進まなかった。ポンプが動かず、分解しても分からない。そこで、ボイラーの蒸気圧を上げることには賭けました。

ボイラーマンは、このボイラーは戦時中から動いていないので爆発するかも、と拒んだ。私は広島で珍しかったお菓子を渡して、説き伏せました。ようやくポンプが動いた。わらにもすがる作業での成功です。この出荷前の試験は国内造船所で評判になり、受注が一気に増えました。

7 親子げんか 信用のため採算度外視

10月5日

1940年代末、製造したポンプの出荷前試験のため、ボイラーがある広島大に通う日々が続いた。

ポンプは毎回、馬車で3時間かけて運びました。工場から広島大まで3キロだけど、馬の道草がひどくてね。進まないんですよ。戦後、馬は良い物を食べていない。少し引っ張っては道端の雑草を食べて動かない。時間を浪費していました。

自前のボイラーの調達を急ぎました。けれど、新品を購入する資金はない。そこで、工場長の私自身が中古品を探して自転車や広島や呉を走り回りました。

呉市広地区で大型ボイラーを見つけ、18万5千円で入手した。

旧日本軍の駆逐艦から陸揚げされた雨ざらしの大型ボイラーでした。払い下げを受けて、工場に持ち帰った。稼働に向けた労働基準局の検査で、予想外の欠陥が見つかりました。長い間に入り込んだ雨で内部が腐食していたのです。

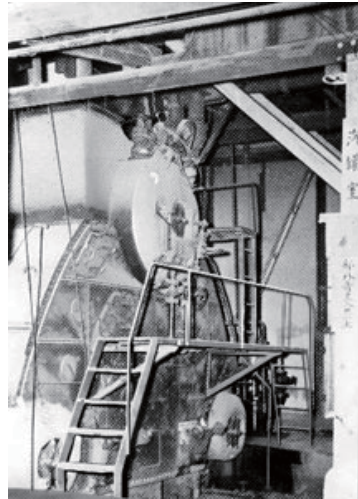
既にお買い取りしており、後退はできない。今の三菱重工業広島製作所に持ち込み、修理を依頼しました。見積もりは出なかったが、とにかく使えるようにしてくれと。修理期間は2カ月。費用は166万円でした。

当時、新興金属工業所(現シンコー)の月商は500万円だった。

ボイラー購入と修理で200万円を費やしてしまった。高いと思ったが、しょうがない。だけど、養父の社長(筒井留三さん)はかんかんだった。「会社をつぶす気か」「技術面ばかりで経営を考えていない」と怒鳴られた。私は「出荷前試験というお客さんとの約束が果たせなくなる」「約束が守れないと注文も取れない」と反論しましたよ。

親子げんかは尾を引いた。その後もボイラーは必要になったけど、おやじが留守の時に購入契約を結びました。相談したら採算が合わんとかで「ノー」と言われるに決まっている。とにかく動くのが信条の私は、こつそりともやりました。

でも、これは私の勝ちじゃない、お客さんの求めをかなえるためだ。そう考えていました。客先の信用を勝ち取って50年代半ばに船舶用ポンプの国内トップとなり、おやじに認めてもらえたのを覚えています。



約200万円を投じて工場に据えた試験用ボイラー。高額な費用が親子げんかの火種となった

8 タービン開発 米国行脚空振りで発奮

10月7日

1956年、私は單身渡米しました。業績の拡大には、原油タンカーで使う大型のカーゴポンプ（陸揚げ用ポンプ）の生産が不可欠と考えたからです。そのポンプを駆動するタービンの製造で、業務提携先を探すのが目的でした。

2カ月かけて、20余りのタービンメーカーや船主を訪問した。

きっかけは前年。建造中のタンカーで大型の外国製カーゴポンプを見たことです。私たちは当時、原油の陸揚げ作業で最後に残った油を吸い上げる小型ポンプを製造していた。間近にカーゴポンプを見て、やはりこのタンカー向けポンプの主役を手掛けたいとの思いが強まりました。

羽根車の回転で液体を押し出すカーゴポンプと、その羽根車の回転を生み出す蒸気タービンはセット。私たちがこだわる出荷前検査のためにはタービンも自前で製造する必要があるけど、ノウハウがなかった。そこで、先進企業に協力を求めました。

米国に住んでいた故松田耕平さん（元マツダ社長、元広島東洋カープオーナー）が同行することもあった。

私の妻（満枝さん）と耕平さんの妻（勢津子さん）が姉妹。私と彼は義兄弟に当たります。企業研修でシンシ

ナティに住んでいた彼は、通訳などで私を助けてくれました。

こんなこともありました。2人で訪れた工場。対応してくれた役員は最初丁寧でした。しかし、「シンコー」を神戸製鋼所と勘違いしていたようで、広島の新興金属工業所（現シンコー）と説明すると追い出されてしまいました。耕平さんは「広島为企业をばかにしている」と大変に怒っていたのを覚えています。

提携に応じる企業はなかった。

収穫なし。情けない気持ちで帰国しましたが、もう独自に開発するしかないと思腹をくくりました。取引先への相談から、タービンに詳しい人が神奈川県鎌倉市に住んでいると知りました。私は勉強と称して休日のたびに夜行列車で鎌倉に通い、最終的に設計を頼みました。

それから1年。57年10月にカーゴポンプとタービンが完成しました。双方を製造できるメーカーは世界にも少なく、大きな武器となった。業務提携の失敗が、シンコーの地歩固めにつながったと思っています。



業務提携を目指して米国企業を訪問する筒井さん

9 輸出企業へ 米国に若手を送り出す

10月9日

1968年、皇太子さま(現天皇陛下)が来社されました。広島で輸出に力を入れている東洋工業(現マツダ)と私たち新興金属工業所(現シンコー)を視察された。私が47年に入社してから20年余り。小さな町工場が成長し、皇室の方が見えられるまでになった。感激しました。

案内したのは副社長だった私。皇太子さまは工場内で大きな声を出し、世界シェアや輸出比率などを次々と質問されました。予定時間を過ぎながらも、私は世界各地でのアフターサービスの強化などを説明しましたよ。

世界展開を本格的に始めるきっかけはその5年前。63年の欧米の船主巡りだった。

開発した原油タンカーのカーゴポンプ(陸揚げ用ポンプ)とタービンを日本の造船所だけでなく、海外船主に直接売り込もうと考えました。ロンドン(英国)やニューヨーク(米国)の石油メジャーを訪問



工場では当時の皇太子さま(左から2人目)を案内する筒井さん=左端(1968年)

したのです。すると、日本のポンプメーカーはアフターサービスが悪いとの苦言を受けました。

それは、故障した場合の交換部品の調達に時間がかかるとの指摘でした。現地メーカーと比べると、不具合を日本メーカーに伝えるだけでも手間だった。文書での見積書のやりとりにも日数が必要。こうした課題を克服するため、私はすぐに海外へ駐在員を置くことを決断しました。

欧米訪問の翌64年、ニューヨークとロンドンへ営業所を開設した。

誰を派遣するか。海外でアフターサービスができる技術屋を社内ですら探しました。私は高校の13年後輩に当たる吉岡巖君を指名しました。

吉岡君は独身だった。1人で旅に出すのもかわいそう。私は嫁さん探しからやり、私の媒酌で結婚式を挙げさせました。そして、東京五輪の最終日に私と吉岡君夫妻は東京へ向かった。翌日、「新婚旅行に行っていない」と言っ、ニューヨーク行き飛行機へ送り出しました。

吉岡君は英語ができなかったが、私は気にも留めなかった。早く営業所を開きたかった。吉岡君は半年で英語を習得し、現地の船主と良好な関係を築き、シンコーの信頼性向上に貢献してくれました。駐在員の活躍のおかげで、海外造船所へのポンプ輸出が始まったのです。

10 トップ交代 造船不況で経営が悪化

10月12日

1970年代半ばの造船不況。船舶用ポンプの世界大手となっていたシンコー(当時新興金属工業所)にも受注キャンセルが相次いだ。

本当に苦労しました。注文取り消しが次々と入った。キャンセル料を取れる状況だが、景気急変でやむを得ないと考え、うちは要求しなかった。後日、ある造船所の社長に呼ばれて感謝され、自家栽培のタケノコが詰まった大きな袋を持たされたのを覚えています。

ただ、経営はきつかった。77年10月までの1年間の売上高は前年より25%も減り、赤字に転落。赤字が拡大した翌78年に、おやじ(養父の筒井留三社長)は希望退職の募集を決めました。

社員には私の出張中に伝わりました。夜に帰社すると労働組合の組合長が怒鳴り込んできた。私は普段、組合交渉で「従業員の幸せを願っている」と訴えていた。組合長に「日ごろの話と違う」と詰め寄られ、本当に苦しい気持ちでした。結局、全社員475人のうち115人が辞めた。企業再建を心に誓いました。

79年12月、社長を継いだ。

私は還暦(60歳)で、おやじは喜寿(77歳)だった。私とおやじは平素、お互いに物を言わなかった。はた

目にはけんかのように見えるけど、実はお互いを知り尽くしているから、信用しているから言葉が要らなかつたのです。

それまでもコンビで会社を引っ張ってきました。社長になったといっても感慨はなかった。会長に就いたおやじからは「思うようにやってくれていい。つぶさんようにやってくれ」と頼まれました。

就任時の売上高は造船不況前のピークの4割を下回っていた。

経営改革を急ぎました。手始めに、創業時から続く毎朝の社長訓示をやめました。当時、朝礼で社長が毎日、日々のニュースや経営理念を従業員に説明していたのです。

トップの思いを伝えるには効率的だったかもしれないが、度を越していました。納期遅れで視察に来た取引先からの「こんな状況でも朝礼をやるのか」との指摘もあって廃止を決断しました。こうした無駄の排除と並行して、船舶だけでなく陸上への進出を考えるようになりました。



養父で創業者の留三さん(左)と経営を話し合う筒井さん(1979年ごろ)

11 陸上進出 LNG用ポンプに挑む

10月13日

造船不況を経験して、船舶部品の需要がいつまでも右肩上がりではないと痛感しました。大きな波がある。社長となった私はこの大波をならす方策として、陸上で使うポンプの開発、製造に力を入れました。

社長就任の1979年12月。国産初となる液化天然ガス(LNG)の陸上移送用ポンプを出荷した。

実はLNG船の荷揚げ用として開発を始めたポンプでした。原油タンカー向けで世界シェアの8割を占めるトップ企業となった私たち。今後何をすべきかを取引先に訪ね歩いていた時、川崎重工業(神戸市)で「クリーンなLNGが注目されるようになる」と教わり、担当者を決めて開発していったのです。

LNG船で経験を積んでから、陸上のLNG基地への出荷を考えていました。だけど最初の問い合わせが大阪ガス(大阪市)だった。貯蔵タンクの米国製ポンプが故障がちで1年持たないとの話をもらいました。

「1台、やってみないか」と言われた時、私は悩みました。新商品を新分野で始める。失敗すれば、陸上での成功は一気に難しくなる。でも、私は飛び込んだ。挑戦する気持ちを抑えられなかったからです。

1号機は主要部品の交換もなく、2年半、順調に稼働した。

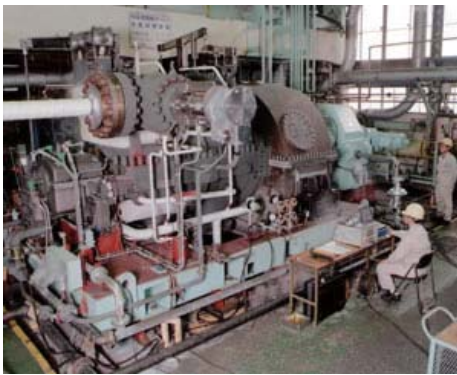
大阪ガスから追加で31台の注文を受けました。評判がすぐに東邦ガス(名古屋市)や中部電力(同)に伝わり、

今は東京電力（東京）へも納めています。LNGタンクの急増という世界の成り行きに先駆けることができました。これがうちの得意とするとところだと思えます。まあ、運が良かったんですが。

近年は自家発電設備向けの蒸気タービンの出荷が増えている。

特にタイで伸びています。世界有数の砂糖生産国のタイ。製糖工場で、サトウキビの搾りかすを使ったバイオマス自家発電設備の設置が広がり、あちこちでシンコーのタービンが使われています。

バンコクの事業所を中心にアフターサービスを徹底しています。もちろん、出荷前には本社で性能試験をやります。60年前から変わらないこだわりが、陸船用ポンプ・タービンメーカーとなったシンコーを支えているのです。



工場で作動状況のチェックを受ける
タイの製糖工場向けタービン

12 社会貢献 孝行を説いて人材育成

10月14日

1986年、広島青少年文化センター（広島府中町）の理事長に就任した。

センターは若者の研修やサークル活動に使ってもらっています。高校生の進学を支援する奨学金事業にも取り組んでいます。

センターは（養父でシンコー創業者の）筒井留三が64年に設立しました。設立時には社員401人が5千万円を寄付。会社が社員の年末手当を計5千万円分上乘せし、割り増し分を寄付する形を取りました。会社がよちよち歩きの頃ですよ。留三は社会貢献と言うが、私は工場の投資に使いたいなあと思ったものです。

ただ、設立してからは熱心にやりました。広島地区の企業が新入社員の研修で使い、私は講師と呼ばれた。農家に生まれ、学校に通うために田畑を売ってくれた親への感謝などを語りました。

当時は組合活動が盛んで、若いもんが座り込んで給料上げると訴えていた。仕事そっちのけで昇給を求めている。矛盾しているでしょう。私は講話で自分の苦勞を伝え、孝行の大切さを説きました。それが、会社の発展に尽くす人材の育成につながると考えたからです。

親孝行はシンコーの新入社員研修でも柱に据えている。

毎年やっているのが錦橋(岩国市)から松陰神社(萩市)までの徒歩研修
全員が132キロを歩く。仲間を思いやる心を養います。そしてゴール
の神社では吉田松陰先生の親を思う気持ちが刻まれた石碑を見る。大成
する人はみんな、孝行の気持ちが強かったと伝えたいのです。

69年には米国の女子高校生のホームステイを受け入れた。

今はサンフランシスコに住むベス・ブラントン。私が所属する広島東
ロータリークラブの交換留学生プログラムで来日し、1年間わが家で暮
らしました。浴衣を着せ、お花を習わせた。日本の文化を伝えました。

家内ともども娘のようにかわいがったホームステイから40年余り。今
でも、誕生日や新年には必ず手紙が届きます。そして「お父さん」と呼
んでくれています。

これが、青少年育成を目的にした交換留学生制度の本当の姿ですよ。一生続けたい。そう思います。



ブラントンさん④を囲む筒井さん⑤と妻満枝さん(1969年)

13 異国支援 恩返しのため世界奔走

10月15日

シンコーのポンプとタービンを世界中の方々がかわいがってくれている。その恩返しをしなきゃという思いがあります。世界中の人の役に立ちたいのです。

ブラジルと交流する広島日伯協会を発足時から支えている。

設立は1979年。広島東ロータリークラブの仲間で同年配の水馬義輝君（元みづま工房社長、96年死去）の娘が結婚してブラジルに渡ったのがきっかけです。水馬君から、交流の場をつくりたいから協力してくれと相談を受け、私は協会の役員として参加しました。

98年には会長に就きました。先代は元マツダ社長の山崎芳樹さん。母校の広島高等工業学校（現広島大工学部）の5年先輩です。総会の前日に「年じゃけえ、えらい。あんた会長をやってくれ」と頼まれました。後輩の私を愛し、信頼してくれとったんでしよう。引き受けました。

サンパウロ市にあるブラジル広島県人会の新会館建設に尽力。2003年に完成した。

00年に訪ねた旧会館は古く、狭かった。周囲の治安も悪く、県人会から建て替えたいとの要望を受けました。私は帰国して県知事や広島市長に協力を求めたがなかなか動いてくれない。そこで、県人会の会長をブ

ラジルから呼び寄せ、あらためて県や市を巡りました。

結局、県と県市長会、町村会、経済界、日伯協会から計1億5千万円を寄せてもらい、新会館の建設資金としました。完成した会館は広く、体操教室や神楽の練習場所としても愛用されています。会館建設で私はブラジルの国家勲章を頂き、州と市からも表彰された。こんな広島人はおらんと自負しています。

ことし9月にはインドネシア・バリ島の奉仕活動を視察した。

私が国際ロータリー第2710地区（広島、山口県）のガバナーだった94年、地区の世界奉仕として移動婦人検診車のバリ島への寄贈を提案しました。97年に贈呈が実現。今も使われています。

視察では多くの住民が喜んで利用する姿を確認できました。良いことをしたと、うれしかった。検診車は更新が必要な時期にきている。私は支援を続けたいと思っています。



ブラジル広島県人会の新会館で開いた移民100年記念式典で乾杯の音頭を取る筒井さん＝左端(2008年、サンパウロ市)

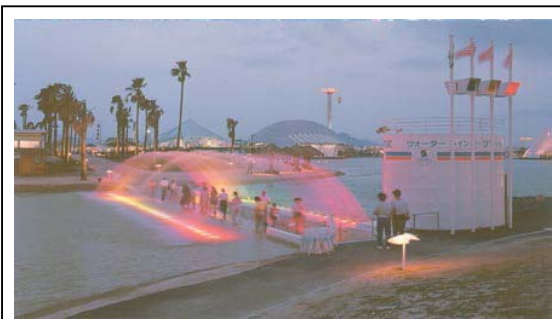
14 遊び心 海島博でポンプをPR

1988年、新興金属工業所はシンコーへと社名を変更。翌年の「海と島の博覧会・ひろしま」で周知を図った。

海島博のメイン会場（広島市西区）に、大型ポンプで吸い上げた人工の海の水で頭上に噴水のアーチをかけるウォーターレインボーブリッジを出しました。幅2メートル、長さ20メートルの水位を下げて海底の橋を出現させ、来場者が渡れる仕掛けです。150万人に歩いてもらいましたよ。

私たちは海の仕事をしている。だから、海をテーマにした地元の博覧会で、ポンプの威力を伝えたいと思いました。ポンプで吸い込んだ水をはき出して進むボートも提供しました。シンコーの名前と事業をしっかりとアピールできました。

92年のジャパンエキスポ富山では出展作がエキスポ大賞に輝いた。



海島博のメイン会場に設けられたウォーターレインボーブリッジ(1989年)

10月18日

ポンプで送水する324平方メートルの噴水装置をつくりました。人が近づけば体重を感知して1メートル四方の水の噴射が止まる仕組みで、噴水の中を自由に歩けるのが特徴です。

今でも会場だった公園（富山県射水市の県民公園大閣山ランド）に残っていますよ。富山県民にどのように親しまれているのでしょうか。設置から20年が過ぎた姿を見に、1回行ってみようと思っっています。

喜寿を過ぎ、社長のバトンタッチを考えるようになる。

先代のおやじ（留三さん）は喜寿で、私に社長を継がせた。その時還暦だった私も17年頑張っつて、喜寿でのバトンタッチを考えました。だけど77歳の時、継がせる息子（現社長の幹治さん）がそこまで成長していなかったもんだから、もう少し頑張ったんです。そのうち死ぬまでやりたいと思うようになりました。

社長交代は2007年8月1日。88歳の誕生日です。私の米寿を祝う小宴で発表しました。この年の春、私はある企業の社長交代のパーティーに出ました。立派な会合に感心しました。私も体力があるうちに、このようなパーティーを開きたいと思い、退任を決意したのです。

息子の経営には口出しをしないように努めている。会長となつた私への社長以下からの報告はめっきり減りました。年を取っていると煙たいのでしようよ。寂しくなりました。

15 生涯現役 貫いた実直さを次代に

会長就任から4年が過ぎた。

今でも毎朝8時から30分間、工場を歩いています。ポンプやタービンを製造する工作機械が計画通りに動いているかを点検しているので、動きが遅かったら速くなるように修正しないとイケない。厳しい競争の中で生き残るための絶え間ない合理化の努力の一つですよ。

家内（満枝さん）を1998年に失った今の私にはシンコーの発展が唯一の楽しみであり、生きる希望です。社業を伸ばすには、信頼性の高い製品の供給とアフターサービスの徹底しかない。課題には正面からぶつかり、乗り越える。私の経験を徐々に社長（長男の幹治さん）や働いてくれる皆さんに伝えていこうと考えています。

本社のビルに掲げる額縁を大切にします。中には「誠以貫」の3文字が書かれている。



工場内を歩く筒井さん。会長に就き、90歳を超えても現場を見つめ続ける

10
月
19
日

「誠をもって貫く」と読みます。先代（養父で創業者の留三さん）が戦時中、取引先の呉海軍工廠（こうしょう）の幹部からいただき、大事にしていた書です。良い言葉だね。私の経営理念の一つです。

お客さまに満足を与え、代金だけでなく感謝の気持ちを受け取れるような製品づくりに誠心誠意打ち込んできた。町工場からグローバル企業に成長したけれど、工場の海外移転は考えていません。お客さまを喜ばせる品質の維持には日本人の頭脳と根性が必要で、国外に植え付けることができないからです。

今の円高は苦しいが、克服できると考えています。魂を込めたものづくりを正直にコツコツと続ければ、道は必ず切り開かれるものです。

生涯現役の思いが強まる。

子どもの頃から続ける毎朝20分間の冷水摩擦のおかげで、体は健康そのもの。これからもシンコーという会社とお客さんに恩返しをしようと思っっています。100歳までは仕事を続けてみたい。そして、人生に花を添える努力をしたい。そう思うとります。

あとがき

九月下旬から十五回にわたり中国新聞の「生きて」というコーナーで取り上げて頂きました。先ず取材して下さい、わかりやすくまとめて頂いた経済部記者の山瀬さんに感謝致します。

今回の連載は予想外の反響を呼び、全体をまとめて読みたい等の声を耳にし、少しでも皆様のお役に立てるならと、本書のようにまとめました。

私に出番が回ってきたのは、戦中五年にわたる軍隊生活を経験し、戦後は船用関連工業に身を投じ、技術開発や製品開発に励み、海運・造船業の発展に些かなりとも貢献できたからと思っております。

現在の私がありますのも、日頃からご支持くださる方々や、従業員の皆さんのお陰と心からお礼を申し上げます、あとがきとさせて頂きます。

二〇一一年霜月

筒井 數三